

My Favorite in Harp's song

ハープ 私の1曲

第5回 ハープ奏者／講師
吉田 みちこ

『トウルネチェック：
シューベルト幻想曲』

故事に「人間至る処青山(せいざん)有り」という。大志を抱いて、郷里や親元を出て大いに活動すべきだということであり、人間ひとり活躍できる余地はどこにでもあるのだからから、気にせず行けという意味も。吉田みちこの分岐点に、この「シューベルト幻想曲」は大きく左右した。一聴して分かるのだが、この曲はいわばシューベルトの楽曲の良いところ取りの、シューベルト・グラフィティのような曲。メリハリの付け方やベース配分が難しく、独奏ではそれなりに勇気がある曲だ。これを吉田さんは、昭和62年に当時の皇太子妃(現上皇后)であった美智子妃殿下の御前で演奏したことがある。今に至るまで、この曲の演奏では生涯ベストの出来栄えだった。「展開にドキドキしたわ」と、音楽家でもある美智子妃殿下から、直接ご感想も賜った。

この栄誉に浴するまで、彼女も多くの研鑽を積んできた。取り分け、中学校から大学まで上野学園で学んだ彼女は、まさにハープ漬けの半生を歩んでいた。男兄弟ばかりの中の末っ子。学園生活では、中学校からハープを続けている彼女は、指導してきた故ヨセフ・モルナール氏からすれば秘蔵っ子だ。そんな環境で、彼女は「どうすれば周囲が喜ぶか」ということばかり考えていたという。ある時、師の演奏するこの曲を聴いた。打ち震えるような感動だった。モルナール先生は、吉田さんへの指導は実に厳しく、彼女も必死に喰らいつき高校卒業を迎える。彼女は、大学は他の音大への進学を考えていた。それは当時普通のことであり、その意思を師へ伝えに行ったところ、即座に却下されたという。「あなたは、この学園に残るべき人だ」と。なぜ否定されたのかは理由を言ってくれなかった。しかし、師の強い勧めで上

野学園大学へそのまま進学した。その選択が、皇居での演奏に結び付くとは。「音楽大学卒業生演奏会」と銘打たれた桃華楽堂における演奏に、彼女が推挙されたのだ。何を演奏するかという段になり、今迄なら「この曲をやれば皆が喜ぶだろう」と、色々な曲を天秤にかけたであろうが、この時ばかりはシューベルトに決めていた。かつての師の演奏が心に残っていたからだ。師の十八番のひとつでもあった曲の選択で、吉田さんはまた叱責を受けるとして具申したら、師は「あ、その曲やりますか? いいですね」と相好を崩したという。心の底から、これを御前演奏したいという自意識。師への恩返しを無意識ながらも籠めた選曲。この瞬間モルナール氏も、吉田さんが一本立ちする時が来たことを悟ったのだろう。邪推にはなるが、この時目を細めたモルナール氏の嬉しさは、いかばかりであっただろう。手元に置き続けた内弟子格の吉田さんが、忖度抜きで師のゆかりの曲を、集大成でもある御前演奏で選んできた。娘の巣立ちを素直に喜べた瞬間だったのではないか。今日自らの“青山”を見つけた吉田さんは、師の思い出と共に、今この曲を愛でている。



EVENT
SQUARE

スイベント
スクエア

12/12 松村多嘉代(ハープ)+辺見康孝(ヴァイオリン)
東京・ラリール

12/20 早川りさこ(ハープ)、池松宏(コントラバス)、
金子鈴太郎(チェロ)
東京・紀尾井小ホール

12/21 金井早苗、毛利沙織、カフェ・ドゥ・ラ・ハープ
東京・レストランテサルーテ竹芝

1/21 SANA E(ハープ)+森田香子(ヴォーカル)
東京・Live Bar Daring(舵輪)

●Harp Lifeでは、ハープにまつわるコンサートや
イベントの協賛／協力を無料で行っております。過
去イベントでも、多くの成果を上げました。事前PR
として誌面もしくはWEBのHarp Lifeで告知しま
す。但し、実施日3ヶ月を切った情報は、扱いかねま
すので予めご了承ください。
お問い合わせ→ harplife@ginzajujiya.com

●台風19号の長雨で被害を受けた皆様、心よりお見舞い申し上げます。さて銀座十
字屋では、先の台風19号の被災地域に限り、年内いっぱいサルヴィハープの無料点検
サービスを開始するという。大小にかかわらず、大切なハープの状態が心配な方は、ぜひ
問い合わせせてみてほしい。
☎03-5635-3380(平日10:00-17:00)

●本誌と姉妹メディアであるハープライフWEBが
好評展開中です。随時コンテンツも更新されて
おりますので、ぜひアクセスしてみてくださいね。

The
Last
Chorus



情報寄稿先: harplife@ginzajujiya.com 発行人/倉田恭伸 編集人/森 泰義

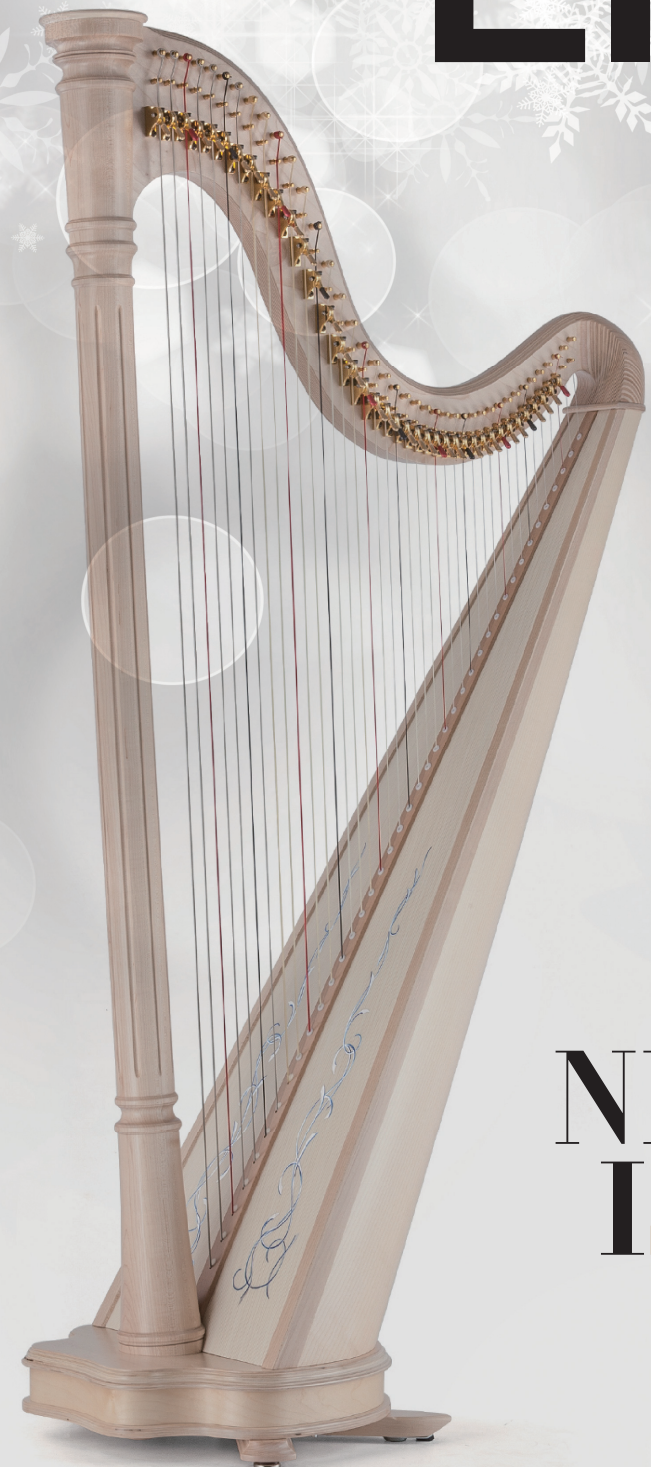
A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

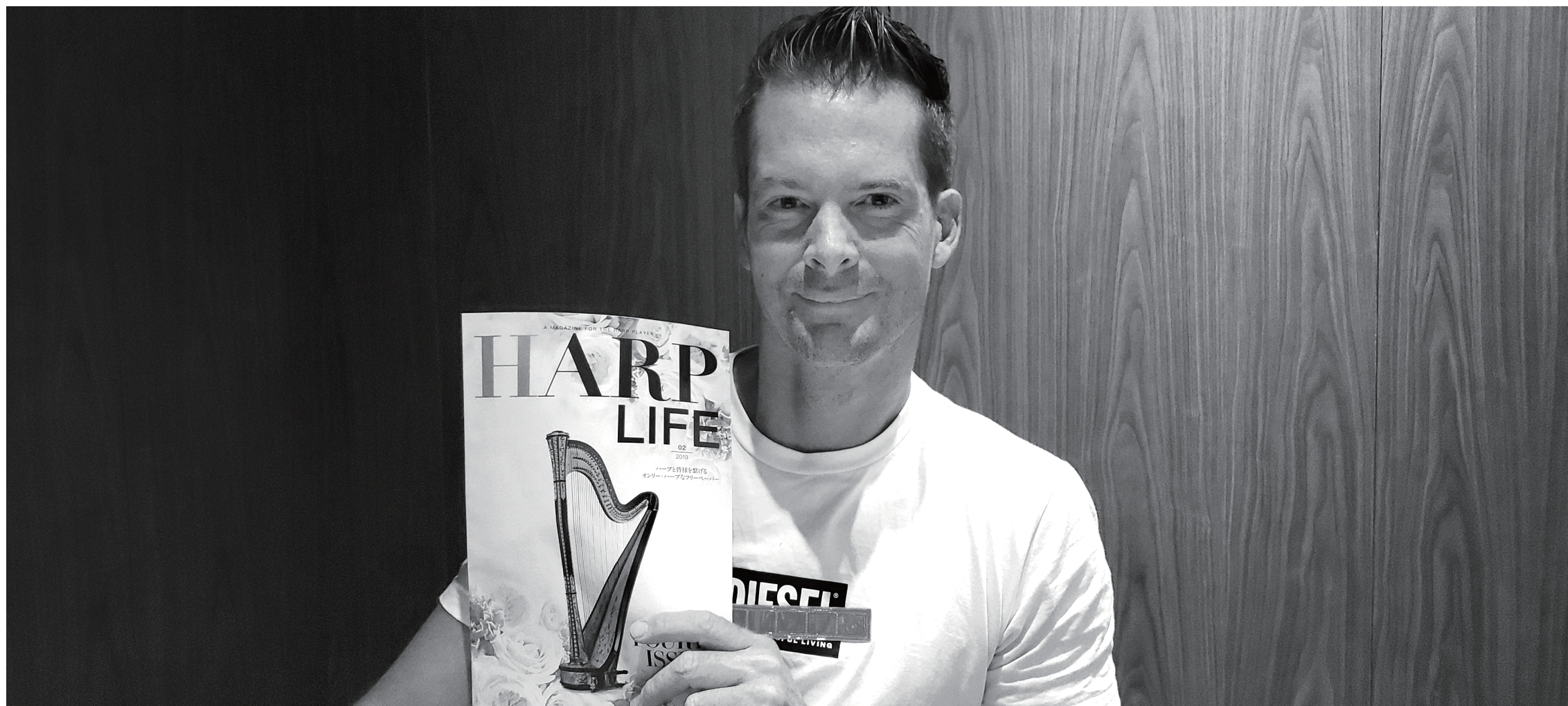
12

2019



NINETH
ISSUE
Vol.9

XAVIER MASTRE



The prospect of the champion

Special Interview

編集長インタビュー：グザヴィエ・ドウ・メストレ

～王者の展望～

グザヴィエ・ドウ・メストレ。

その栄光に満ちた名は、今もハープ界の頂点として敬愛を集めている。

弱冠25歳でウィーン・フィルのソロ・ハーピストに就き、幾多の有名オーケストラからの招聘は数知れず。各国でソロ・コンサートを行えば、どこも満員。ツアーで多忙な中、ハンブルグ大学で教鞭も執る。とにかくハープの概念をことごとく覆してきた王者である。メストレは、なぜ王者なのか。長年ずっと抱いてきた疑問が、直接話を訊くことで解けてきたような気がする。

それは、メストレに次ぐレミー・ヴァン＝ケステレン、エマニュエル・セイソン、サーシャ・ボルダチョフといった有望なヤング・ライオンたちによって活況を呈しつつあるハープ界について意見を聞いた時だった。彼は、その恐ろしく回転の速い知性で即答した。

「非常に良いことです。彼らの活躍は、単に男女の区別でなく、まして出自や年齢、国や肌の色、経済状態などに左右されることなく、ハープというのは、誰もが享受できる普遍的な楽器であることを証明する一翼を担うからです。私のスタートからして、そうだった。ハープは、まだまだオーケストラの片隅の楽器でした。ましてソロ演奏をするなど、観客は頭から信じない。だ

から、演奏やアルバムによって証明するしかなかったのです。しかも一過性のものであってはならなかった」。

かねてから、メストレの出すアルバムは、どれもが一話完結の読み切り小説のような趣を持っていると思っていた。まだ珍しかっ

た東欧の美しく哀しき調べ、イタリア古典の掘り起こし、情熱の異郷スペインとの邂逅。一作ごとにコンセプトが決められ、各国から選りすぐりの佳曲が収められてきた。一過性を否定する真意は、録音も行き当たりばったりではなく、研鑽の成果を封入すべく、慎重かつ意図的に制作してきた反映ではないか？

「その通り。どういうコンセプトにするか、それは最も心を砕くパートです。我々ハーピストの宿命ですが、とにかく（ハープ用の）譜面がないのですから。弾きたい曲は、ハープ用にアレンジしなければならない。ハープの普遍性を

証明するには、地道にその成果を残してゆくべきです。そして、それらは後に誰もが『私も奏でてみたい』と思われるようなものでなくてはならない。私の今までのチャレンジはその連続であり、実は数作先までのプランが常に頭の中にあるのです」。

ハープ奏者というのは、
ハープが誰もが享受できる
普遍的な楽器であることを
証明する一翼を担います。

私のスタートからして、
そうだった。

Special Interview XAVIER DE MAISTRE



▲巨匠たちの迫真の競演に会場も息を呑んだ

うーん、凄い。そこまで考えているとは。たぶん、メストレにあってヤング・ライオンたちにはないものがあるならば、それは「ヴィジョン」である。ハープ界というライブが、どうすれば活性化し、ハープが誰にも認識されて当たり前の楽器になるかという眺望が、恐らく彼には見えているのだ。若い演奏家たちに展望がないとは言わない。しかし、ハープを用いた自分語りで終わっているようでは、まだまだ青い。演奏するからには聴き手がいるのだ。彼らがどんな音楽体験をしたいか。そして、ハープでどこまでその魅力をシェアできるか。また未来のために、自分が何を成すべきか。無論、王者だからといって何もかも見通す目があるわけではないが、自ら掲げるヴィジョンと聴き手やハープの今後の担い手たちに、どう折り合いをつけるかということを、メストレは真摯に研究し実行してきた。頂点に立っても、未だ試みの地平線を歩んでいる。王者としての凄みは、まさにここにある。

完全無欠ともいえるメストレに、横槍を入れてみた。最新のアルバム「スペインのセレナータ」は、スペインがテーマだ。しかし、以前から「アルハンブラの思い出」をステージで十八番にするなど、スペインはメストレにとってすでに消化したテーマではないのか。

「ルセロ・テナとの出会いが全てでした。元々フラメンコ・ダンサーだった彼女は、メキシコ生まれながらスペインの国宝のようなひと。彼女のカスタネットを聴いたら、目の前に丸ごとスペインそのものが立っている気がして(笑)。自分のスペイン感の書き換えが必要だと感じましたね。誰もがルセロが自分の祖母ならいいと思う、その素晴らしい人柄にも惚れて、思い切って共演を申し出たら、最初は怪訝そうな顔されましたが、音を重ねてゆくうち、今まで思い付かなかったスペインの解釈が生まれてきたのです…」。

結果は、満員の会場が証明した。「それがハープとカスタネットの競演であることを忘れ、音楽そのものに魅入られてしまった」という会場での賛辞を、「最高の誉め言葉だった」と本人が振り返るほどの出来栄えだった。

断言しよう。神は平等ではない。少なくとも音楽神ミューズは、明らかにメストレに肩入れしている。彼の次なる目標は、南アメリカの音楽だという。アルパなど土着のハープもさかんな国々の音楽に、彼がどうアプローチするのか。今から柄にもなく胸の高鳴りを抑えきれない。

(取材協力／ジャパン・アーツ、写真協力／©武藤章・紀尾井ホール)

RECOMMENDED Discography

おすすめミニ・ディスコグラフィ



「スペインのセレナータ」
メストレのスペインへの音楽的再訪。ルセロ・テナのカスタネットとの共演が、絶妙の一枚。



「スメタナ: モルダウ」
当時はさほど注目されていなかった東欧ゆかりの曲をフィーチャーしたセンスの光るアルバム。



「ロドリゴ: アランフェス協奏曲」
表題曲は、今やメストレの十八番。初めてスペインへの憧憬を綴った佳作。



「ヴェネツィアの夜」
オーストリアのバロッド楽器によるオーケストラを起用。17世紀のイタリアン・クラシックの世界へ誘う。

これらCDの
お買い求めは、
銀座十字屋オンライン
ショップでどうぞ。



SHANGHAI REPORT

上海リポート

英国王立検定、 白熱の盛況



アジアで最大級の楽器見本市「ミュージックチャイナ」が、今秋も開催された。会場の上海メッセに、わが編集部も潜入取材を試みた。経済繁栄と比例するように、着実に音楽人口を伸ばしてきた中国は、当然ながら楽器の販売も堅調であり、ハープもその例外ではない。しかし、編集部が着目したのは、むしろ彼らの「教育熱」のほうだった。

それは、楽器展示ではなく、楽譜や参考書の並ぶブースでの光景。最近、日本のハープ界でも徐々に注目を浴びつつある英国王立音楽検定 (ABRSM) のブースを見かけて覗いてみると、狭いブースには人だかりができていた。来場グッズでもくれるのかと思ったら、皆、我先に陳列されている検定用の参考書を食い入るように見つめているではないか。ここぞとばかり、何冊も参考書を買い込む猛者もたくさんいる。会場は、凄い熱量である。

かつて同見本市で、エレクトリック・レバーハープのデルタをデモ演奏したことがあるサーシャ・ボルダチョフが、以前こんなことを言っていた。「とにかく色々な楽器が珍しいみたいだった。16kgがデルタを野外で演奏すると、一団が足早に寄ってくる。あの食欲さは、強烈だよ」と。中国の音楽熱は今や、かなりの短期間で、次なる段階に入ったようだ。音楽は芸術であるが

ゆえに、一律評価が難しい。また、客観的なものさしがないければ、身に付けた芸事も他者にはなかなか認められない。その点ABRSMの検定は、英国王立機関がいわば自分の音楽能力に御墨を付けてくれるのだから、人口が多く、常に競争にさらされる中国の音楽シーンでは、ことのほか重宝されているのだろう。実際、演奏家を雇う側からすれば選考やオーディションの際に、検定ランクは大きな目安になるし、選考の時短にも繋がる。たぶん、今の中国は、「もう楽器は揃えた。あとは、どう実用に活かしてゆくか」というフェーズに移行しているのかもしれない。音楽はグローバル・ランゲージだ。譜面が読め、楽器を通じ自己表現ができれば、より「世界」が近くなる。そういう意味では、日本もうかうかできない。ハープで部門では、銀座十字屋が積極的に受験を奨励しているようなので、ぜひ問い合わせてみてほしい。



Point of PERFORMANCE

演奏のポイント

今回は、3本の指による分散和音の練習です。
誌面の〈13-15〉〈17〉は、1オクターブ下げて左手でも練習して、次の総合練習
〈48〉で応用します。そして、「きよしこの夜」は、静かなクリスマスの雰囲気ゆっ
くりと弾きます。音の余韻を大切に演奏しましょう。

第1指・第2指・第3指による 分散和音の基礎練習

〈13〉 左手 右手 右手3指をひいたところ

〈14〉

〈15〉

〈16〉

〈17〉

総合練習

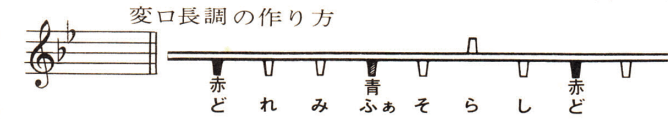
〈48〉

〈17〉 は、1拍で和音をひく時に、下の音から3指・2指・1指の順に音をずらしてひきます。これをアルペジオ奏法といいます。（くわしくはLESSON 7のアルペジオ奏法の説明を読むこと）

1トで（みそし）をひいたら、手をじゅうぶんやすめて 次の和音（みらど）に一度に指をおいて ひきます。

〈17〉

応用練習



〈きよしこの夜…… グルーバー〉



季節の おすすめハープ

Vol.9

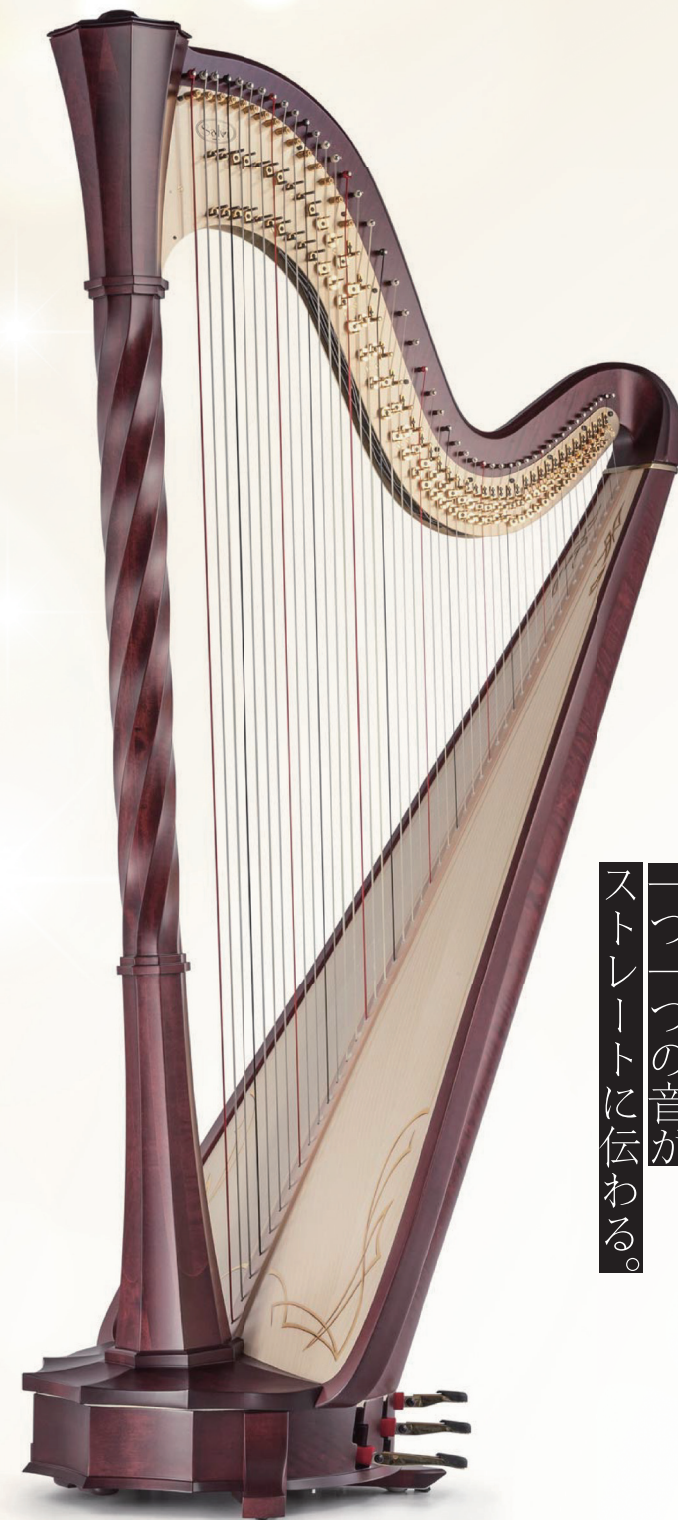
季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「アポロ」です。

その登場は、センセーショナルでした。発売当時は、世界中のハープ・ショップでさかんにアポロを勧められて困惑したという現象が起こるほど、期待の大型新人とも称すべき賞賛でアポロはシーンに迎えられたのです。

理由は、サウンドボックスにありました。アポロは、当時の他メーカーのハープと比べても、最大級の響板と胴体を誇っていました。サウンドボックスのデザインは、ピークを下部に寄せることで、ルックスにも堂々とした風格が漂い、支柱はらせん状の斬新なデザインが施されています。名は体を表す、ではないですが、全能神ゼウスの長男で太陽神、竖琴を手に執る音楽・文芸の神と同じ名を授けられたアポロは、サルヴィハープにしてみれば、まさに次代のエースの位置付けだったと言えるでしょう。

サウンドボックスが大きいということは、イコールより豊かな音量を意味していました。つまり「元気な音」が大きな特徴のハープなのです。したがって、明るいタイプの曲の演奏や多少非力な方でもサウンドを大きく響かせたい方に向いています。一方で、音色の深みに関しては、子細なニュアンスを表現する能力は多少控えめかもしれません。音の粒立ちがよく、一つ一つの音がストレートに伝わるアポロは、昨今のサルヴィによるサウンドボードの全面改良により、その個性を取って大きく喧伝されることも少なくなりましたが、今も多くのプロたちに愛され、新発売当時のまま、サルヴィ自慢の長男坊であることに変わりはないのです。

音の粒立ちがよく
一つ一つの音が
ストレートに伝わる。



Apollo

アポロ

Harp Caravan

ハープ・キャラバン第7回

さらさ

SARASA

Machiko × 森川敏行

Irish harp & Acoustic guitar



レバーハープとギターのデュオ、ティコムーンに魅せられて以来、本来なら音域のかぶり合いで成立しえないと思っていたハープとギターという弦楽器同士の編成に、ずっと心を持っていかれていたが、先日新たなデュオに出会い、その想いをさらに強くしている。広島出身の「さらさ」というデュオだ。

とあるフェスティバルに参加していた「さらさ」との出会いには唐突ではあった。外見はいかにもカフェが似合いそう。ゆったりした空間で、アコースティックな響きを伴う二人のユニゾンが気持ちいい…そんなグループだろうと勝手な想像を巡らせた。だが、いざライブに接すると、彼らが「羊の皮を被った狼」であったことを知る事になる。ボサノバっぽいものを想像していたら、かつて流行った西海岸フュージョンのようなインストが流れてきた。2つの楽器は、サマーブリーズのように、啞然とするこちらを尻目に、

軽やかにキラキラと駆け抜けてゆく。かつてのGRPLレーベルのアーティストの新作ですよと言われても、微塵も疑わないだろうね。次は、ヨーロッパのビーチ・リゾートに似合いそうな調べが…。これまた、シロッコのように存在感をたっぷり植え付けて駆け抜けた。その時、「あ、そうか、歌わないのだな」と初めて気付く。オリジナル曲ばかりだということにどこかなつかしく、曲毎にかなりテーマが深く練られていて、まるで彼らのゆく先々から旅先の絵葉書が届けられる感覚。メロディに歌心があり、インストながらまったく飽きがこない。この引き出しの多さ、お主らできるな。ふたりはたぶん、楽器の習得からコンビ結成のあとも、今に到るまで実に様々な音楽体系を吸収してきたに違いない。

レバーハープのMachikoが繰り出す音の流れは、煌めいていてしかも速い。涼しい顔してそれをやる。レバーをセットする動作、これ親指一本で上げ下げし、もたつきを

一切感じさせない。ギターの森川敏行は、楽器を知り尽くした演奏に技量の高さが窺い知れる。アンプを通じて、アコースティックギターのボディをスラップしながら、まるでカホンのようなリズムを醸し出し、音に厚みを加える。デュオの概念は、ゆうに超えた音を捻り出してくるのだ。端的な比較は好まないけれども、ティコムーンがインドアで光る音楽だとすれば、さらさのそれはアウトドア。いずれのコンビもそれぞれの楽器を習熟し、なんでもできる演奏家であることを前提として、あえてデュオという枠のなかでコンビネーションを最適化させ、いかに魅せるかを狙っている。最も効果的に自己表現できるから、オリジナル曲で勝負しているのも共通項といえる。

ハープ・キャラバンは通常、目論見をつけて取材に行くのだが、今回は出会ってしまった感じ。聞けば10年選手で、1年に1アルバム制作を急じてきた、ストイックで信念

のあるデュオだった。知らないのはこちらの方だった。日本って、まだまだ広いんだなあ。



▲オーストラリアでバスキングした時の模様。海外でウケるというのも、彼らの音楽的資質をはかる重要な指標になるだろう。